山口県博物館協会

会報

第30号
2005年12月

私の中の吉川幸次郎先生

～書物の中の師～

山口県博物館協会会長
松　尾　勝　美
（山口県立山口博物館長）

まだ学生の頃のことである。何気なくながめていたテレビから流暢で美しい中国音による杜甫か李白かの詩を朗読している画面が流れてきた。中国人かと思った。

こんなに見事なすばらしい外国語の発音を聞いたことが今までに一度もなかったので、その時の印象は強烈であった。

吉川幸次郎という名前を初めて知ったのはその時である。京都大学教授で、中国文学者ということであった。中国文学者というのはフランス文学者やドイツ文学者よりはるかに偉い学者であるような気がした。

全共闘華やかりし頃、京大文学部助教授の椅子を捨て、作家になった高橋和巳が吉川幸次郎先生の弟子であったことや研究者としての才能を惜しまれたことも後に知った。また、フランス文学者である桑原武夫や河盛好蔵が吉川幸次郎先生の親しい友人であることも。

あれほど強く驚嘆するほどすばらしい学者であると脳裏に焼き付いた吉川幸次郎先生であったが、私には何か遠い、手の届かない存在であるように思っていた。ずっと後になって、たまたま古本屋に入り、何気なく本を探していたら吉川幸次郎全集が目にとまった。私は心が躍るのを感じた。その古本屋には全集の全巻が揃っていた訳ではない。私はわずかな持ち合わせしかなかった。とにかくこの全集を買わなければと思った。吉川幸次郎全集第四巻、第五巻、第十七巻を買い求めた。確か発行時の定価より古本屋の値段の方が高かった。吉川幸次郎と言う名前を知ってから何年経ったのであろうか。

私の永年の思いは決して間違ってはいなかった。すごい学者である。おそらくこんな学者は百年経っても出ないと思った。私は吉川幸次郎先生の学問的な業績については何一つ語る資格はないが、その偉大さはわかる。

この全集の中で、江戸時代の儒学者である伊藤仁斎、荻生徂徠らの学問的業績の高さを知った。江戸時代と言えば、徳川家康がその政権を創始するにあたり、宋以後の新哲学「朱子学」を国教とし、盛んに学ばれた時代である。

「伊藤仁斎（1621－1705）は、後の本居宣長と共に、江戸時代における最も独創的な学者と私は考える。」と先生は言っておられる。仁斎は、朱子その他の宋儒による孔子解釈に疑問を感じ、孔子の哲学をその原点について丁寧に検討し、宋以後の説は孔子の真意ではないことを論証した人である。仁斎の著書には「論語」の注釈を彼自身の説によって書き直した「論語古義」がある。仁斎は、京都堀川の私塾「古義堂」において学問を講じた。公卿、武士、町人にわたって、直接の聴講者を広汎に持ったばかりでなく、その学風は、一世を風靡したという。吉川幸次郎先生は、仁斎のことを「私の読んだ範囲では、日本人の書いた漢文の、第一流に位する。」とも言っておられる。

仁斎は死の直前、未知の江戸の若い学者から、一通の手紙を受け取っている。当代の学者と自分が思うのは、あなただけであるという、大変熱っぽい文章であった。その差出人こそ

荻生徂徠であった。

荻生徂徠（1666－1728）も当代一流の学者であった。仁斎同様「論語」の注釈「論語徴」という著書がある。仁斎の「論語古義」も「論語徴」もいずれも中国に逆輸入され、日本人にもこんな学者がいると、当時の中国人が驚いたということである。

私は、この全集３巻から多くのことを学んだ。全集は二十何巻とかあるという。66歳で文化功労者になられている。吉川幸次郎先生にこそ文化勲章をあげるべきでなかったかと、今も思っている。

ずっと後になって、「先師先哲」という味わい深い本に出会った。著者竹ノ内静雄は筑摩書房社長をされた人で、京大文学部で吉川幸次郎先生の学問の厳しさに圧倒された一人である。この中に「京都中国学の二人の恩師」という章で、京大講師の頃の吉川幸次郎先生のことが尊敬と敬愛を持って語られている。

また、「人物交差点　吉川幸次郎」という章で、先生の学問や友人のエピソードを紹介している。その中に〈「フランスの一流学者とフランス文学を論じたら、日本の学者はどうしても引け目を感じますがな。わたしだけとちがいまっせ。ところが吉川君が中国の学者と話しとったら、向こうが引け目を感じよる。」桑原武夫さんがそう語ったことがある。「わしも中国文学などやらんで良かった。あんなもんやっとたら、一生吉川君に頭上がらへん。」これは河盛好蔵さんの述懐。いずれも酒席での話である。〉とある。

「このような碩学は今後当分－それは百年にせよ－出ないかも知れない」と竹内静雄は書いている。この本のあとがきの中で、桑原武夫さんが文化勲章を受けられるとき、お祝いのついでに私が「吉川先生がご健在で、もし一緒に受賞なさったのでしたら、私はもっと嬉しかったでしょうに・・・」と言うと、桑原さんは「吉川君のは、ご本人が断っていたようなんや」と。

吉川幸次郎先生は、昭和55年、76歳ですでに他界されているし、桑原武夫も今は故人である。吉川幸次郎先生の学問的業績の一つは、中国自体を含む世界の中国学の最高峰である「尚書正義」の訳である。

私は、吉川幸次郎先生の深遠な学問を万分の一も理解できないが、読み返すたびに、何かが会得され啓発される喜びを感じている。定年後には吉川幸次郎全集を全て読破したいと、今から楽しみにしている。

吉川幸次郎先生の学問的業績や著書は後世の中国文学研究者や文学を志す人達に大きな遺産として残るであろう。また、吉川幸次郎先生の学者としての学問への態度や学問の方法、情熱などは私達に大いなる刺激と共感を与えてくれたことは間違いあるまい。

博物館にはおびただしい資料が収集、保存されているし、多くの研究業績が報告されている。これらの資料や業績を県民や市民の財産として後世に伝えることが、今、博物館で仕事をしている者の使命であり責務ではなかろうか。

明治の顕官
杉　孫七郎

毛利博物館
館　長　小　山　良　昌

杉孫七郎（文久2年於オランダ国撮影）

史料調査等で山口県内の旧家を訪ねた場合、床の間に掛かった掛け軸に「杉孫七郎」或いは「杉聴雨」「杉重華」の書を見ることがよくある。その杉こそは「長州の三筆」として知られた能書家であり、かつ、幕末から明治期にかけて活躍した顕官の杉孫七郎（1835～1920）である。彼の書家としての評価は、明治14年（1881）の『書画一覧』によると揮毫料は６円とあって、当時の巡査の初任給が６円であったことと比較すれば、当時の孫七郎が人気・知名度共に如何に高かったかが推測される。

孫七郎は、天保６年（1835）、萩藩大組士植木五郎右衛門の二男として萩城下町に生まれた。孫七郎の諱は重華、字は子華、通称を忠次郎のち徳輔、孫七郎と称した。雅号については総数20以上を使い分けしており、なかでも最もよく使った雅号は「聴雨」で、他に鯨肝、呑鵬、玉蘭堂、古鐘、今業平、或いは晩年の隠居所であった山口町古熊にあやかった古隈山人なども用いた。

孫七郎は幼時より文学や武道の稽古に励み、文学は佐々木源吾に師事して研鑽し、その結果、嘉永元年（1848）、13才の時に即席で詠んだ漢詩が藩主毛利敬親公の上聞に達し、金三百疋を賞賜されるという栄誉に浴している。藩校明倫館に入学したのはやや遅くて20才の時で、最初入舎生として入学したが、成績優秀により半年後には食費が支給される居寮生となっている。

槍術は岡部右内（宝蔵院流）に師事して厳しい修業に努め、安政５年（1858）、23才の時には修業のため150日間の賜暇を願い出て、中国・四国・九州の各地に槍術家を訪ねて武者修行に励み、次いで同年11月には江戸に出て腕に磨きをかけて奥義を究めており、現代風な表現をすれば、文武両道に秀でた秀才であったと言えるだろう。

この向学心に燃え、文武両道に熱心な孫七郎に対し、藩内大組士の杉家から養嗣子の申し出があり、嘉永２年（1849）には杉家に婿入りした。杉氏は大内氏の重臣で剛胆な武将として鳴らし、いわゆる「大内氏の七本杉」と称された中世以来の武将の家で、大内氏の滅亡後は毛利元就に臣従して毛利家臣となった。安政元年（1854）、養父に従って江戸に登り、滞在中は藩主への来客の応対係である「式台見習」役を勤め、次いで手廻組（藩主の側近）に加えられ、小姓役を務めて藩主の信任を得たことは、彼の人生における大きなターニングポイントとなった。

文久元年（1861）10月、孫七郎は藩命によって長州藩から唯一人、幕府が派遣した遣欧使節の一行に加えられた。同年12月日本を出帆した一行は、香港からシンガポール、インド洋・

紅海・カイロを経由して地中海を渡り、フランスのマルセイユに上陸し、欧州諸国（フランス・イギリス・オランダ・プロシア・ロシアなど）を視察して、翌年12月には約１年間にわたる海外視察を終えて帰朝した。

彼の洋行は、長州藩としては万延元年（1860）、幕府の遣米使節の一行に加えられて渡米した北条源蔵に次ぐ二人目の海外派遣で、三人目に当たる高杉晋作の上海派遣に先んずるものであった。孫七郎の書簡によると、

「英仏其外各国の事情、形勢、制度、器械等ノ視察ヲ命ゼラレ、且航海術ヲ修業セシムベキヲ命ゼラル」

と記している。彼の欧州派遣は、高杉晋作と共に将来の長州藩を担うエリート官僚としての派遣であったことは間違いない。特に孫七郎の訪欧の場合、アジアを経由して遠くヨーロッパまでの船旅の途次や訪問先の国々の実情、特にヨーロッパ先進諸国における産業革命達成後の政治形態、経済状況、社会制度・情勢、或いは最先端の科学技術などを具に見学し、世界情勢をほぼ正確に理解し把握できたであろうことは、帰国後の長州藩の政治的動向に少なからぬ影響を及ぼしたことは想像に難くない。

事実、帰国以後の孫七郎は、元治元年(1864)から始まる幕末動乱の時期には藩の政務座に列し、藩の奥番頭、直目付、当役用談役、軍政詮議用掛などの要職を歴任して藩の存立に精力を傾けた。特に、元治元年８月、英仏蘭米による四国連合艦隊の馬関襲来に際しては、応接掛として井上馨・伊藤俊輔（博文）らと共に四国艦隊の砲撃回避交渉に当たって尽力し、開戦後の講和に臨んでは執政（交渉代表）高杉晋作を助けて渡辺内蔵太とともに参与として交渉に当たり、更に正使井原主計の副使として山県半蔵・伊藤俊輔とともに横浜に行き、講和の目的を果して帰藩した。また、慶応元年(1865)2月、正義派と俗論党の藩内の内訌に際しては、杉梅太郎らとともに中立的立場の鎮静会を結成し、会員二百名余を率いて藩内の鎮静に努めた。慶応２年(1866)６月、幕府による第二次長州征討（長州では四境戦争と言った）に際して、孫七郎は四境戦争を如何に戦うかの戦略策「愚論」を公表すると共に、自らは軍監参謀として石州口の戦に参戦して、大村益次郎と共に幕府軍（浜田藩兵ら）と戦って活躍した。また、慶応３年の討幕東上出兵に際しては、家老堅田大和の参謀として参加し、慶応４年(1868)１月から始まった戊辰戦争には、親幕藩の備後福山藩および伊予松山藩を降して萩に凱旋した。

一方、藩主毛利敬親の孫七郎に対する信任は厚いものがあった。幕末の激動期に近侍役として君側にあって藩主を補佐し、良き相談役として重要な政務の決定にあずかった。なかんずく、藩政の初頭以来、長年にわたり本家毛利氏とは不和の関係にあった藩内岩国領主吉川氏との関係改善に努め、藩主敬親の意向を受けて融和交渉に当たった。また、藩外に対しては肥前大村藩、薩摩島津藩、安芸浅野藩などの雄藩を訪問して対幕府戦に向けて折衝し、藩相互の意思疎通を図るなど、その功績は大きいものがあった。

維新以後は、明治３年(1870)、山口藩権大参事に就任したが、同４年の廃藩を機に東上して国事に従事することになり、宮内大丞、翌年秋田県令に赴任し、再度宮内大丞を拝命の後は、宮内少輔、宮内大輔と栄進し、同11年(1878)には侍輔を兼任、同16年(1883)特命全権公使としてハワイ国カラカワ皇帝の即位式に参列した。その後、内蔵頭、ついで皇太后大夫など、宮内省を中心とした数々の顕官を歴任し、同30年(1897)には枢密顧問官、同41

年(1908)議定官に任ぜられた。国は孫七郎の維新以来の国事に奔走した功績をたたえ、華族に列して子爵を叙し、従二位勲二等旭日重光章を授けた。

なお、杉孫七郎の偉さは、明治期の顕官となって宮内省を舞台に国事に従事しただけではなく、孤児などの弱者にも目を向け、気配りし、資金的な援助していたことが挙げられる。具体的には、長府覚苑寺住職進藤端堂が、明治33年(1900)境内に「防長孤児院」を開設した。これは山口県内では児童福祉事業の先駆をなす施設であったが、孫七郎はこの孤児院に対し、15年間にわたり得意の書を揮毫してはその益金をもって資金的な援助を行っている。このことは、孫七郎が若き日に遣欧使節の一員として先進諸国の視察を行った際、市民のボランティア活動など社会福祉事業などの実状を目の当たりにして、啓発されたものではなかったろうか。覚苑寺境内にある「杉聴雨先生頌徳碑」には、住職進藤端堂による碑文が刻されている。

以上のように、孫七郎の一生は激務に明け暮れた日々であったことが伺えるが、その激務の最中でも作詩に対する思いは格別のものであったらしい。文久元年(1861)幕府の訪欧使節団員として訪欧した際、訪問した各地の印象を漢詩94篇で記録し、後に詩集として出版した『環海詩誌』をはじめ、『鴻爪雑詩』『聴雨山房詩鈔』などを上梓している。

晩年は郷里の山口町古熊に隠居所「玉蘭草廬」を営み、悠々自適の余生を送った。明治45年に大病を患い、自虐を込めて詠んだ詩集『回春集』を上梓している。その中の「地獄行の記」は、孫七郎の晩年においてなお衰えぬ作詩への気力・情熱を示しているので、その一端を紹介しておく。

『地獄行の記』

「口あれとも食ふ能(あた)はず　耳あれとも聴く能はず
　足あれとも立つ能はず　目あれとも視る能はず
　但し許すものは放屁千里耳(のみ)
　腕は干柿の如く　身は棒鱈の如く　顔は糸瓜の皮の如く
　人間化け物の旗を翻し　地獄の本門より入れり」

参考資料

『防長回天史』　『大内村誌』　「諸履歴」「藩臣履歴」(毛利家文庫)
「杉の欧州旅行」(両公伝史料)　『華族列傳』(国乃礎)　「覚苑寺」(城下町長府案内)
など

博学連携の試み

山口市歴史民俗資料館
館長　大　谷　博　昭

平成１７年度に入って近県で新しい博物館のオープンが続いている。４月に広島県呉市の大和ミュージアム、１０月に島根県斐川町の荒神谷博物館、福岡県太宰府市の九州国立博物館が開館し、脚光を浴びている。本県においても昨年度萩博物館が開館し、それぞれの地域が辿った歴史や文化を紹介する特色ある展示が行われている。展示に当たってもコンピュータをはじめ新しい視聴覚技術を取り入れた、入館者により分かりやすい工夫がされている。また、参加体験型の展示も設営され、興味を持って楽しく見学できるようになっている。しかし、厳しい財政状況の中、既設の多くの館では施設設備の更新や設置はなかなか困難である。そこで、各館の特性を生かした、入館者に喜ばれ親しまれる運営が今求められている。

当歴史民俗資料館では、収蔵している資料を生かし、学校の社会科学習や総合的な学習の一助になる事業はできないものかとささやかな取組みを行っており、その一端をご紹介し、皆様のご指導を仰ぎたい。

１　事業のねらい

小学校の社会科中学年の学習内容に、地域の人々の生活の変化や人々の願い、地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心について学習するものがある。具体的な学習内容については、古くから残る暮らしにかかわる道具、それらを使っていた頃の暮らしの様子、地域に残る文化財や年中行事、地域の発展に尽くした先人の具体的な事例を取り上げるよう学習指導要領に示されている。こうした小学校中学年の社会科学習の内容を受けて、当館が収蔵している古くから使われていた道具などを展示し、これらの道具の観察や調査を通して、子どもたちに今昔の違いや変化をとらえられるようにしている。また、道具の使い方の体験を通して、人々の生活が変わってきたことや昔の人々の知恵や工夫に気付いてもらえるように努めている。

２　取組みの実際

見学は限られた時間の中で、一人ひとりの児童が資料を身近に観察し、体験してもらえるように、４つのグループに分かれ４つのコーナーを順に回ってもらっている。多くの学校は全体の見学時間を１時間にして、１つのコーナーを１５分で移動している。学校から団体で見学の申込みを受けると、事前に学校の先生に来館してもらい、展示品や体験活動について打ち合わせを行っている。そうして、前もって４つのグループを編成しておいてもらうこと、当日協力してもらうこと、準備してもらうものなどについてお願いをしている。

４つのコーナーとしては、灯火具コーナー、昔のくらしコーナー、米作り農具コーナー、石臼ひき体験コーナーを設け、各コーナーに職員が付き、展示品の名前、使い方、特長などを説明したり、使い方を指示したり、質問に答えたりしている。

・灯火具コーナーでは、灯明（とうみょう）、行灯（あんどん）、燭台（しょくだい）、提灯（ちょうちん）、ランプなどおよそ５０点の常設展示を利用している。このコーナーではそれぞれの灯火具の特長を説明するとともに、部屋の照明

を消して灯火具の明るさの違いを体験したり、火打石を打ったりする体験をしてもらっている。子どもは昔の人々が大変暗い中で生活していたことに驚いている。

・昔のくらしコーナーは展示室の中央に長机を並べ、七輪、箱膳、竹のよろず、番傘、火鉢、湯タンポ、豆炭あんか、炭を使う炬燵（こたつ）、児童用の机や椅子、教科書、学用品などおよそ５０点を臨時に展示している。子どもたちにとってははじめて見るものが多いが、転がっても火や灰がこぼれないように工夫された安全炬燵（回転式）に驚いている。また、戦前の教科書は１年生からカタカナが使われていたこと、算数の問題が今の教科書より難しくなっていたことにもびっくりしている。

昔のくらしコーナー

・米作り農具コーナーは、苗代づくりから脱穀、俵詰めまでの昔の農具７０点を米作りの流れを追って常設展示しているものを利用している。農具の名前や使い方の説明をし、米作りの苦労や工夫を理解してもらっている。子どもたちは、田植枠が回転させて作業できるようになっていたこと、除草機が昔は木の角材に竹の爪を打ち付けて作られていたこと、唐箕が風の力を使って籾殻と米を分けていたこと、万石通で米を選り分けていたことなど先人の知恵や工夫を知り感心している。

・石臼ひき体験コーナーは、学校から大豆を煎って持ってきてもらい、子どもたち全員にわずかな時間ではあるが、きな粉をひいて持ち帰ってもらっている。グループの人数が多い時には２つの石臼を使い、学校の先生にもお世話をお願いしている。

石臼ひき体験コーナー

後日、子どもたちからお礼の作文をたくさんいただくが、子どもたちにはこの石臼ひき体験が強く印象に残るようである。当館の職員は子どもたちの感想を通して展示内容や説明の仕方を振り返っているが、今後は引率の先生方へもアンケートをお願いし、取組みの改善を図っていきたい。

逍雲堂美術館10年を振り返って

逍雲堂美術館
館　長　高　杉　紀　雄

今年８月１日、逍雲堂美術館は１０周年を迎えることが出来ました。平成７年８月１日宇部市新天町２－８－１に私設の美術館を開設いたしまして、早いもので満１０年になりました。

逍雲堂美術館の常設展示として、館の２階に関野準一郎の版画、厚東孝治の陶芸作品を展示しています。また３階には、二口善雄の植物画、師井勝の油彩・水彩画を展示しています。それゆえに、版画と植物画の美術館　逍雲堂美術館としてＰＲしています。常設展示といっても、３ケ月に１度大幅な展示替えを行って季節感を出すように努力しています。

館の１階は、企画展示室として、年間を通していろんな企画展示を行っています。

今年の６月３０日から、１０月２０日まで、逍雲堂美術館１０年の歩み展を前半と後半に分けて１０年分の企画展を紹介してきました。

昔の展覧会のポスターを会場を取り巻くように展示し、その上にその展覧会で展示した作品を展示紹介しました。

ＰＲの不足もあって、来館者は少なかったのですが、主催者にとってはこの１０年を振り返る良い機会になりました。

最初の頃は、館の所蔵作品の紹介に力点がおかれていたように思います。
関野準一郎の版画展、二口善雄の植物画展、地元画家の師井勝の油彩・水彩画展を多く開催しました。

また、旧知の書家高田宏苑の書道作品展、写真家伊沢正名のきのこ・変形菌、コケ、カビの写真展、植物画家今井真利子の蘭画展等で各氏にも大変お世話になりました。

その後、逍雲堂美術館の１つの特徴であります植物画については、全国的にも植物画を常時展示しているところが少なく、二口善雄の植物画を常時展示しているということより、日本植物画倶楽部の展覧会を開催しませんかとのお話をいただきその後、日本植物画倶楽部の展覧会を数回にわたって開催させていただきました。最初は、日本植物画倶楽部も結成後、間が無く図録もカラーコピーで手作りというような状態でしたが、日本植物画倶楽部の１０周年記念事業として作成された最近の図録「日本の絶滅危惧植物図譜」はハードカバーの立派な本で解説も日本語、英語の両方の言葉で記されています。またシート状で額装しやすい特装版も同時に発行され隔世の感があります。

展覧会も初期には巡回展でなく全国で１ケ所開催でしたが、昨年の展覧会は逍雲堂美術館を含む全国５ケ所を巡回し、今年になって、アメリカのワシントンとシカゴにも巡回しました。逍雲堂美術館で開催した展覧会の時期に絶滅危惧植物についての講演会を開催し山口県立山口博物館の嶋村学芸員にお話をしていただきました。

また、二口善雄生誕１００年記念植物画展につきましては、多くの方々から作品をお借りし開催することが出来ました。

逍雲堂美術館のもう１つの特徴は、版画です。関野準一郎の作品を館の２階に常時展示していますので版画にも力を入れています。関野準一郎の作品の他に次男の洋作氏の作品の展

示も行いました。

また山口県創作版画会のメンバーの方々（田村三平、山根みどり、河村よし子、高木昭、山下郁太郎各氏）の作品展や銅版画展（中村隆、春野修二両氏）を開催しました。来年はじめには孔版画展も計画しています。

「逍雲堂美術館10年の歩み」展

それから、地元画家の作品紹介の１つとして秋に行われる宇部まつりの時期に「宇部の風景展」を１０回を超えてずっと続けています。地元画家の描いた宇部の風景を来館者は楽しんでいるようです。

また、地元画家の紹介としましては、岡本正和（鉛筆画）、木村日出子（水彩画）、奥田賢吾（鉛筆画）、前原幸己（油彩画）、宮内省三（切り絵）、正田明子（油彩画）、藤里美枝（油彩画）、泉本洋（油彩画）、松原美代子・大介（水彩画他）、伊藤信夫（水彩・油彩画）、久保真治（水彩画）、久保春子（陶芸）、野村典成（植物画）、庄島信基（油彩画）、山本辰昭（彫刻）各氏のご協力のもとで行えました。

一昨年長く鹿児島大学で陶芸を教えておられた厚東孝治氏が山口に帰って来られて、逍雲堂美術館で展覧会を開催していただきました。それが縁で作品を常時展示させてもらえることになりました。その結果、展示の幅が広がってきました。

１０年を振り返って多くの支援者に恵まれて活動を行って来ました。今後も着実に美術館の活動を行っていきたいと思います。

美術館の広報活動につきましては、私設の美術館のため公共施設にはポスターすら貼っていただけない時期がありました。今も時々教育委員会や市の後援がないのでだめだといわれるのは、残念な事です。

山口県博物館協会に加盟してからは少し改善されましたが、依然として不愉快な思いをすることがあります。

山口県博物館協会としても、加盟館のＰＲ、中でも私設の館に対する支援を考える必要があろうと思います。また、「山口の博物館」もＰＲの素材として重宝なので今後出版も考える必要があろうかと思います。

山口大学埋蔵文化財資料館

山口大学埋蔵文化財資料館
館 長 糸 長 雅 弘

埋蔵文化財資料館全景

山口大学埋蔵文化財資料館は1978年（昭和52）に、現名誉教授小野忠熙氏によって蓄積された山口県内の考古資料と、1967年（昭和42）から1973年（昭和48）にわたる山口大学の統合移転事業に伴い吉田キャンパス（吉田遺跡）から出土した貴重な遺物を収蔵し、構内遺跡調査研究の場とする目的で設立されました。国立大学の法人化に向けた学内組織の再編により、2004年（平成16）4月に、当館は附属図書館・メディア基盤センターとともに新たに設けられた学術情報機構に所属することとなり、現在、館長（兼任）1名、副館長（兼任）1名、助手2名、補佐員2名の体制で業務を行っています。

当館の業務は、①大学構内等から出土した埋蔵文化財の収蔵・展示および調査研究、②大学構内等の埋蔵文化財の発掘調査と報告書の刊行、③その他埋蔵文化財に必要な業務の３項目で、特に業務の中心となるのが山口大学キャンパス遺跡の発掘調査・研究です。山口大学では、吉田キャンパスのほか、医学部・医学部附属病院のある小串キャンパス、工学部のある常盤キャンパス、教育学部附属小・中学校のある白石キャンパス、光キャンパスでも遺跡の存在が確認されており、当館が学内規則及び文化財保護法に基づいて発掘調査を行っています。

当館の業務の根幹は埋蔵文化財保護であり、発掘調査の結果、重要な遺跡が発見された場合には、工事計画を変更するなどして遺跡の保護に最善を尽くしています。現在、吉田キャンパスに、遺跡の保存されている区域が２ヶ所あります。１ヶ所は第１学生食堂（ボーノ）南西側で、もう１ヶ所は大学会館南側の前庭丘陵部分です。第１学生食堂南西側では、弥生時代の竪穴住居跡の位置をカラータイルにより地上に表示し、説明板を設置しています。また、発掘調査で出土した植物の種子などを参考にしながらの植栽が行われ、遊歩道やベンチなども設けられています。大学会館南側の前庭丘陵部分は公園として整備されており、説明板を設置しています。これらの遺跡保存地区は、一種の野外博物館として、歴史教育あるいは生涯学習の格好の教材を提供するとともに、憩いの場として利用されています。

展示室

当館では、設立以来、発掘調査成果や収蔵資料の公開・活用に努めてきました。発掘調査の際、貴重な発見などがあったときには現地説明会を開催し、大学内外の人たちに直接遺跡に触れる機会を提供しています。発掘調査の成果については、1983年（昭和58）から報告書『山口大学構内遺跡調査研究年報』として、これまでに16冊刊行することにより公表しています。

また、1988年（昭和63）からは毎年企画展

を開催しており、今年で21回を数えます。2000年（平成13）からは、毎年1回、大学等地域開放特別事業の一環として公開授業を開催するなどして、調査研究成果を公開し、埋蔵文化財への理解を深めていただけるように務めています。

上記の当館の活動は、1996年（平成8）から開設したホームページや広報誌「てらこや埋文」などを通じて行っており、公開授業の模様は「デジタル山口大学」でも公開しています。

このように当館は設立以来、埋蔵文化財に係る様々な活動を行っておりますが、当館の人員体制や施設は十分なものではありません。特に遺物の収納・整理場所は著しく不足しており、展示室も狭隘な状態です。

当館が所属する学術情報機構は、山口大学の学術情報の一元化を図るとともに、教育、研究、社会連携活動等を学術情報基盤の面から総合的に支援し、社会へ向けた学術情報の発信基地としての役割を果たそうとする組織です。当館の収蔵品や発掘調査の成果は大学が所有する重要な学術情報であり、将来的には当館が教育・研究機能をいっそう充実させることによって、資料館から博物館へと発展して行くことが期待されています。

現地説明会（農学部解剖実習棟敷地　平成14年）

第3回公開授業
（山口の歴史にふれる―考古学から見た平川―平成15年）

第4回公開授業
（古代人の知恵に挑戦!―弥生土器をつくってみよう―平成16年）

平川小学校出前授業（平成17年）

豊田ホタルの里ミュージアム

豊田ホタルの里ミュージアム
館 長 小 田 尚 久

平成16年６月５日に豊田ホタルの里ミュージアムは開館しました。場所は、ゲンジボタル生息地として国の天然記念物に指定されている下関市豊田町（以下豊田町）木屋川のほとりです。古くから、豊田町ではホタル（主にゲンジボタル）の保護活動が行われ、その甲斐あってでしょう、今なお多くのホタルが生息しています。

当館はゲンジボタルをイメージしたユニークな概観のため（写真）、ホタルの博物館であることが一目でわかります。展示はホタルの目線でホタルの一生を探検できるコーナーやホタルの生体を展示したコーナー、ホタルの光をコンピュータで再現したコーナー、世界のホタルや日本のホタルについて映像、パネルで紹介したコーナー、豊田町に生息している魚類や昆虫類を展示したコーナーなどで、さまざまな角度からホタルについて知っていただけるような展示で構成されています。また、展示室の10ヵ所にクイズパネルが張ってあり、来館者は半券の裏にある回答用紙に記入しながら周る「チャレンジクイズラリー」を毎日行っています。これにより、クイズを解くためにパネルや映像を見て学び、パネルを探すために展示室を歩き回るので、館内を隅々まで見ていただけるようになっています。また、クイズを解くなかで、いつのまにかホタルのことが学べるようになっています。

なお、当館の常設展示はおおむね変更のできない展示となっておりますが、それを補うスペースとして、小さな講座や公開実験ができるコーナーと２ヶ月毎に展示を更新する小企画展コーナーがあります。前者ではホタルの教室や昆虫の標本教室などを開催し、後者では豊田町の自然を中心としたさまざまな小企画展を行っています。

展示以外にも、当館周辺の恵まれた自然をもっと知っていただこうと、月に数回自然観察会を行っています。今年度は10月時点で19回の自然観察会を行っています。また、ホタルのことをより知っていただこうと「ホタル里親制度」や「ホタル飼育員制度」を今年より実施し、それぞれ多くの参加をいただいております。さらに、ホタルのことがもっと知りたいという町内の小学生を募集して編成した「ホタル探検隊（隊員１０名）」とともにホタルに関する観察・調査を行っています。また、ホタルの保護をより効果的に行うための研究として、町内のゲンジボタルの遺伝子の解析やホタルの分布、生態調査なども行っています。

今後は、なるべく多くの方に当館のことを知っていただけるよう、常に新しい情報を提供していきたいと考えております。

末文ですが、会員の皆様のご来館をお願いするとともに、当館運営につきましてご教示いただきますようよろしくお願い致します。

熱帯植物館10周年を迎えて

常盤公園熱帯植物館

この度、山口県博物館協会に加入いたしました宇部市の熱帯植物館は、『日本都市公園１００選』『さくらの名所１００選』『美しい日本の歩きたくなるみち５００選』に選ばれた常盤公園内に平成３年９月２７日に来襲した台風１９号で旧サボテンセンターの損壊により、熱帯植物館として熱帯植物室、ラン室およびサボテン室などを兼ね備えた総合的な施設として平成7年４月１日に開館しました。

発足時に日本植物園協会への加盟により全国の植物園と植物の交換や情報・意見交換等を行っています。また、同時期に熱帯植物館に友の会が発足して熱帯植物館と連携を図りながら各種イベント等の開催により側面からのご支援をいただいています。

今日まで各植物の維持管理と館内の展示する植物の充実を図り、市民の学習、憩いの場としての進展を図るとともに、園芸植物等に関する講演会と講習会を通年で２４～３２回程度を開催し、また電話等の問い合わせおよび相談コーナーを設けて対応しています。

熱帯植物館の主要な事業経過

・ 平成８年５月には開館一周年の記念フォーラムを開催し、演題は『世界の植物と植物館の役割』について坂梨一郎先生（元名古屋市東山植物園園長）にご講演を戴きました。また、同年に熱帯植物館の植物目録を発行しています。

・ 平成１０年４月に駐日ペルー大使夫妻の御来館のさいに寄贈いただきましたペルー産サボテンの保存と展示コーナーを設置しております。次に、『インドネシア植物の多様性と有用植物』に関し、デディ・ダルナエディ先生（インドネシア生物調査開発センター）にご講演を賜りました。

・ 平成１１年にブラジルの写真展とオーストラリア花展を開催して好評を得ました。

・ 平成１２年４月に植物バイオテクノロジーコーナーの設置に伴い館内に体験学習を開講して小中学生と成人を対象に実施しています。

・ 平成１３年７月には山口きらら博の開催にさいし、秋篠宮殿下御夫妻の御来観の栄を賜りました。

・ 平成１７年４月に１０周年記念事業として『熱帯植物館１０年のあゆみ』と『植物目録』の再版も発行しました。同年９月に記念講演会を開催し、『わが国とヨーロッパの花き園芸』について、肥土邦彦先生（元東京農業大学）を迎えた講演会は市内と地域の方々により盛会に催すことができました。

今後ともこの熱帯植物館が、常盤公園のシンボル的な施設として市民の皆様をはじめとして多くの方々にご利用いただけるよう努めてまいりますので、さらなるご支援と、多くの皆様にご来館くださるようお待ちしています。

サボテン室

赤間神宮宝物殿レポート

赤間神宮
宮　司　水　野　直　房

平成17（2005）年5月には安徳天皇八百二十年の式年祭を迎えるにあたり、これを記念して寛仁親王殿下の御染筆とお成りを仰ぎ、「水天門」掲額と除幕を賜りました。

同時に宝物殿では山口県指定有形文化財「安徳天皇縁起絵図」全8幅と、重要文化財指定の「平家物語」（長門本・全20冊）を中心に源平合戦特別展を開催し、折しもＮＨＫ大河ドラマ「義経」放映とも重なり、日本全国から沢山の方々が参観されました。

この式年に合わせて東京の新人物往来社から「平家伝承地総覧」（定価1500円）を出版、平家落人の秘境、平家の里の全国の地が収録された、画期的な刊行を実現しました。

さらに10月7日は、明治8年に明治天皇の御勅定により「赤間宮」が創建されてから今年は満130年に当り、これを記念すべく収蔵中の源平合戦図屏風（江戸中期・1双）の修復に着手、長門市の三輪善一氏に託してこの日見事に完成、直ちに宝物殿に飾付け参拝者に公開して大好評を得ています。

一方、春秋両方の式年を祝して記念出版を企画し、編者には平家物語研究の第一人者で國學院大学教授の松尾葦江博士に委ね、本宮宝物殿収蔵の平家物語諸写本をはじめ、朝鮮通信使の詩文、楽器の琵琶の悉皆調査等を第一部に収め、現役の東京大学の五味文彦教授をはじめ第一線で活躍される諸先生方に論文を寄稿願って第二部とし、この日を期して東京三田の三弥井書店から「海王宮―壇之浦と平家物語」と題して刊行いたしました。

この論集は、全て今回のために書き下ろされたものばかりで、学会に風を吹込むものと確信しております。学術図書で限定出版のため、定価は一冊8900円となっておりますことを申添えます。

萩　博　物　館

萩博物館
副館長　樋　口　尚　樹

萩博物館外観

平成16年（2004）11月11日、萩開府400年を記念して萩市堀内に萩博物館がオープンしました。平成16年は萩藩の開祖毛利輝元が萩に居城を定め、萩城の築城工事と城下町の建設を始めてちょうど400年目となり、萩市にとっては節目の年でした。

萩博物館が建設されている堀内地区は萩城三の丸にあたり、江戸時代には萩藩の上級武士の屋敷が建ち並んでいました。現在、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されており、江戸時代からの町割りや街路、土塀や石垣などの基礎石、長屋や長屋門などの武家屋敷の一部が残り、往時の歴史的景観をよく伝えています。

萩博物館は、萩藩主毛利家の一門にあたる大野毛利家の上屋敷跡に建築されました。博物館本館の部屋の空間配置も、上級武士の上屋敷の建築作法に基づいて設計されています。本館は鉄筋コンクリート造りですが、外装や内装に地元阿武川流域の木材をふんだんに使っています。エントランスホールは太い松の桁と杉の柱で構成され、床には桧材が敷き詰められ、規模の大きい木造建築物の内部を演出しています。

エントランスホール

博物館敷地内の正面には長屋門、その東側の東南隅には隅矢倉を推定、復元しています。これらの建物は木造建築で、特に隅矢倉は昭和20年代まで残っており、古写真や江戸時代の絵図、現存する類似の建築物をもとに復元しました。

萩博物館は、「萩まちじゅう博物館」の中核施設として整備されました。「まちじゅう博物館」とは、本物の自然や歴史、文化の遺産が数多く残る萩の「まち」を「屋根のない博物館」としてとらえ、それらの遺産を大切に保存し、よりよい形で利活用し後世に伝え、さらに「まちじゅう」に眠っている新しい遺産を掘り起こしていこうというものです。萩博物館には、博物館と「まちじゅう博物館」とをリンクする仕掛けが設けられており、博物館で萩についての様々な分野の情報を入手し、本物が残る萩の「まち」へ出掛け、萩を再発見していただくということです。

博物館本館のエントランスホールに入ると、左手に「まちなみウォークスルー」という萩の「まち」歩きを擬似体験することができる情報機器を設置しています。重要伝統的建造物群保存地区の上級武家屋敷地・堀内と萩城下の港町・浜崎を、実写映像やコンピューターグラフィックスによって紹介しています。

エントランスホールの左奥には、「萩博いきもの研究室」があります。このコーナーでは、萩周辺の昆虫約2000種、貝類約1000種の標本を引き出しに詰め、自由に取り出して萩に生息する昆虫や貝類を調べることができます。

エントランスホール左隣の一室は、「まち博情報センター」です。ここでは、萩博物館の利用の仕方や萩市内を散策する基本的な情報が、端末機器を使って入手できます。

萩博物館の展示室は、大きく「萩学展示室」「萩再発見ギャラリー」「高杉晋作資料室」「企画展示室」からなっています。「萩学展示室」は、自然とともにある「まち」、今に息づく「まち」、人を育む「まち」の3つのコーナーに分かれており、萩に特徴的な自然・歴史・文化を様々な分野から実物資料・レプリカ・模型・映像などを使って紹介しています。

萩学展示室

自然とともにある「まち」では、日本海とそこに生息する魚介類、萩の象徴的な景観の一要素である夏みかん、萩のまちの基礎をつくっている岩石とその岩石の成り立ちに焦点をあて、萩の自然の特徴を紹介しています。このコーナーに置かれている萩の地形模型は、現実では目にすることのできない日本海の海底の地形を表現しています。

今に息づく「まち」では、現在の萩のまちの起源となった萩城と城下町の成り立ち、城下町の仕組みや暮らし、城下町の祭礼などに焦点をあて、城下町の歴史と生活文化を紹介する展示を行っています。このコーナーの町並み模型は、重要文化財菊屋家住宅のある呉服町一帯の町屋を幕末期の絵画と現地調査をもとに精密に模型化したもので、武士・町人、子供・大人、男性・女性と、身分・年齢・性別を問わない160体あまりのミニチュアの人形が萩城下の賑わいをリアルに伝えています。

人を育む「まち」では、萩の歴史の画期となった明治維新をとりあげ、萩の人々がどのように維新の変革にかかわっていったのかという視点から、吉田松陰を中心とする様々な人物に焦点をあて、実物資料を定期的に展示替えしながら展示を行っています。このコーナーでは、「志ここにあり」というタイトルで吉田松陰とその門下生をテーマした映像を30分おきに上映しています。

「萩再発見ギャラリー」は、市民の協力を得ながら展示をつくっていくコーナーです。市内の中学校と連携して行った自然観察会の研究発表、小学生たちと実施したワークショップの成果、萩の二大祭りに繰り出す各町内の山車などを年間数回展示しています。

萩学なんでもボックス

また、同じコーナーの棚には、「萩学なんでもボックス」を設置しています。「萩学なんでもボックス」は、萩に関する様々なテーマに沿って実物資料や模型・レプリカ・解説シートなどを一つの箱に詰め込んだ展示物です。来館者は棚から自由に箱を引き出し、中身を手に取って見たり、触れたりできます。このボックスは出前講座などでアウトリーチもでき、今年度の「グッドデザイン賞」を受賞しました。

「高杉晋作資料室」は、松下村塾の塾生で奇兵隊を結成して倒幕運動に邁進した高杉晋作の遺品や遺墨などを展示して、晋作の生涯を紹介しています。晋作の人となりを15のテーマに分け、定期的に展示替えを行っています。

本館の二階には、天体観測室があります。この部屋には、40cmの反射望遠鏡が設置されています。重要伝統的建造物群保存地区という景観上の制約から、ドーム状の観測室を設けることができないため、観測室は瓦屋根が水平に稼動して望遠鏡が現れる仕掛けになっています。太陽望遠鏡も併設されており、昼間の観望も可能です。

萩博物館には、自然・歴史・考古・生活文化・天文など様々な分野から、萩を再発見できるツールやアイテムがたくさん盛り込まれています。博物館で萩を読み解くカギをみつけ、そのカギを持って本物が散りばめられた「萩のまちじゅう」に出掛け、新たな萩を再発見できる「まち」「ひと」「もの」をつなぐ博物館として、常に進化していきたいと思います。

中国語版の館パンフレット

おおすみ歴史美術館
館長　大　隅　正　和

山口市湯田温泉にある当館は小さな歴史系ミュージアムである。私は館長を兼任しているが、本業？は大隅企業グループの専務なので、ふだんの館長業務は江戸副館長にゆだねている。

さて私は今秋、中国山東省青島市で開かれた山口・和歌山両県主催の「ビジット・ジャパン・キャンペーン」に大隅企業グループのおおすみ観光代表として参加した。山口県と和歌山県は共に山東省と友好協定を結び、また山口市は山東省の省都済南市と姉妹都市であるのはご存知のとおりである。

今回のイベントは、中国の皆さん、関係の深い山口県へどうぞ観光に来て下さいというご案内である。観光バスを持つおおすみ観光の中国版パンフレットを持参し、説明するのが主な目的だったが、せっかくの機会だからおおすみ歴史美術館の中国語版パンフレットも作ろうと思い立った。

出発日は迫っているが、手持ちの館のパンフレットをそのまま中国語に直すのもどうかと思い、新たにレイアウトをすることにした。副館長が大急ぎで構成を立て、私が中国語に翻訳した。私はかつて北京大学に留学し、中国はよく訪ねるので、自慢するわけではないが、まずまず翻訳はできた。

こうしておおすみ観光と当館のパンフをそれぞれ2,000部印刷し、ジャスコ青島店で10月17日から19日まで開かれた観光展で配布した。

期間中私は観光キャンペーンの方が多忙で、館紹介資料の効果のほどはわからなかったが、いわば今回はテスト版である。ささやかな試みであったが、経済発展を続ける中国からどっと観光客が訪れ、山口県の公私立の博物館、美術館が中国語のパンフレットや音声ガイドを備えなければならなくなる・・・・そんな日が来ればと想像するのは楽しい。

三国志城に「三顧会」なる会が出来て

三国志城
館　長　谷　　千寿子

劉備玄徳、関羽、張飛が三顧の礼をもって諸葛孔明を軍師として迎え入れ、国造りに成功したことに因んで三顧会と名づけた会です。

平成15年9月13日に立ち上げ、その時は三顧会員が100名近くまたたく間に集まりました。そして平成17年9月13日現在は270名を超えました。

● 第1回三顧会　（平成16年5月）

テーマ　～三国志を語る～　三国志ゲーム

大勢の三国志ファンの方々が一同に集まり、三国志に寄せる熱い思いを熱心に語りあわれました。

そして三国志ゲームで楽しまれました。

● 第2回三顧会　（平成17年5月4日）

テーマ　～三国志を作ろう・流馬を作ろう～　三国志ゲーム

陶芸家（岡村先生）の指導のもとに、三国志をテーマに粘土で作品造りと会員の考案による流馬作りでした。鋸を使うのが始めての人や、釘打ちをするのが始めての人などが木や板を切り釘打ちをして 仕上がった時の大歓声は今も忘れられぬ喜びに満ちたものでした。

● 第3回三顧会　（平成17年8月14日）

テーマ　～風水講習会・弓術大会・玉璽を探そう～　三国志ゲーム

風水についての講演を日中先生を迎えて実施。第1回・2回・3回と会に参加される人や、仕事の都合で出席できる時のみに参加される人などさまざまです。東京、大阪、京都、滋賀、新潟、島根、岡山、長崎、福岡と遠路をもいとわず各地より集まられます。もちろん県内からは下関、宇部、防府と徳山、岩国、光など各地から都合をつけて集まって来られます。20代、30代の若者が殆どです。それに此の三顧会に参加するには、別にアルバイトをして貯蓄しておくので参加は大丈夫だと云われる方々が大多数です。そうした心遣いで来城参加される方々に支えられている三国志城です。

第３回の三顧会の時には、四人の女性がそれぞれ手作りの衣装でキラビヤかに劉備玄徳、諸葛孔明、関羽、張飛に扮装して大会に参加され、その美しさに会員が魅了され感動の連続でした。

こうした三顧会を開催する毎に三国志城の宝物が年々増え続けることに感激し、全国各地より訪れてくださる三国志城のファンの方々に感謝の念で胸が一杯です。

そんな若さに溢れる三国志城に心から乾杯しながらファンの方々の要望に答えられるように、施設の充実を計りながら頑張ろうと思っています。

山口県博物館協会加盟館

周防大島町	陸奥記念館 橘民俗資料館 久賀歴史民俗資料館 日本ハワイ移民資料館
岩国市	岩国徴古館 岩国美術館 吉川史料館
和木町	和木町歴史資料館
美和町	美和町歴史民俗資料館
本郷村	本郷村歴史民俗資料館
由宇町	由宇町歴史民俗資料館
柳井市	月性展示館 商家博物館むろやの園
平生町	平生町歴史民俗資料館
田布施町	田布施町郷土館
光市	伊藤公資料館 石城の里 三国志城 光市文化センター
周南市	周南市徳山動物園 周南市美術博物館
防府市	毛利博物館 防府天満宮歴史館 阿弥陀寺文化財収蔵庫 防府市青少年科学館 防府市地域交流センター
山口市	福田貝館 山口県立山口博物館 山口県立美術館 山口市歴史民俗資料館 中原中也記念館 のむら美術館 瑠璃光寺資料館 龍福寺資料館 おおすみ歴史美術館 山口大学埋蔵文化財資料館 鋳銭司郷土館 小郡文化資料館
宇部市	宇部市立図書館附設資料館 宇部市石炭記念館 宇部市熱帯植物館 宇部市野外彫刻美術館 逍雲堂美術館
山陽小野田市	山陽小野田市歴史民俗資料館
美祢市	美祢市歴史民俗資料館
秋芳町	秋吉台科学博物館
下関市	東行記念館 下関市立長府博物館 忌宮神社宝物館 乃木神社宝物館 下関市立美術館 下関市立しものせき水族館「海響館」 下関市立考古博物館 住吉神社宝物館 赤間神宮宝物殿 藤原義江記念館 中山神社宝物殿 梅光学院大学博物館 下関市豊田文化資料室 下関市烏山民族資料館 豊田ホタルの里ミュージアム 土井ケ浜遺跡人類学ミュージアム 下関市立豊北歴史民俗資料館
長門市	八幡人丸神社古典樹苑 長門市日置歴史民俗資料館 村田清風記念館 香月泰男美術館
萩市	萩博物館 熊谷美術館 萩史料館 石井茶碗美術館 菊屋家住宅保存会 山口県立萩美術館・浦上記念館 阿武川歴史民俗資料館 萩市立須佐歴史民俗資料館

Contents

● 巻頭言
……山口県博物館協会会長（山口県立山口博物館）松尾勝美 1

● 研究ノート
明治の顕官　杉　孫七郎……毛利博物館 小山良昌 3

● 報　告
博学連携の試み……山口市歴史民俗資料館 大谷博昭 6
逍雲堂美術館10年を振り返って……逍雲堂美術館 高杉紀雄 8

● 新館紹介
山口大学埋蔵文化財資料館……糸永雅弘 10
豊田ホタルの里ミュージアム……小田尚久 12
熱帯植物館10周年を迎えて……常盤公園熱帯植物館 13

● 館園だより
赤間神宮宝物殿レポート……水野直房 15
萩博物館……樋口尚樹 16
中国語版の館パンフレット……大隅正和 19
三国志城に「三顧会」なる会が出来て……谷千寿子 20

● 山口県博物館協会加盟館……22

表紙
宮市天満宮図（宮市は防府天満宮の鳥居前の町で、山陽道の宿場町として栄えました。この図は明治35年（1902）の天満宮の図で、国分寺・佐波川など近隣の名所も紹介しています。）

編集後記

▼　山口県博物館協会の会報30号をようやく発行することができました。会員の皆様に原稿を依頼したときはまだ残暑が厳しい時期でしたが、今は編集後記を書きながら積雪を見ています。月日の経つのは早い、というより編集における手際の悪さを実感しています。発行が遅れてしまいましたことをお詫び申し上げます。

この1年間に3館が加入され、「新館紹介」に寄稿いただきました。現在の加盟館は74館になり、博物館活動を県内の多くの方々に訴えていくためにも、力強い限りです。

しかし、一方では、設立の趣旨や母体、運営形態、収蔵資料の内容などが多様な各館が結集して、博物館事業の普及発展を図っていくためには、これからますますしっかりした舵取りと協会の運営についての積極的な御意見など、皆様のご協力が必要となります。

▼　現在、各館にあっては施設の老朽化や入館者の増加へ向けた取組などとともに、公立館にあっては市町村合併や運営基盤の変更など、課題が山積しています。

今年度の総会で出された意見に基づいて、7月に、研修会の持ち方についてアンケートを実施し、74館の内52館から回答をいただきました。研修の実施をすべきとの回答は28館でしたが、その内容や方法、研修テーマに至ってはさまざまでした。事務局だけで判断することは難しく、研究会を再び立ち上げるには相当な議論が必要であり、今年度は実施を見送るとの結論を出しました。

昭和39年に11館で創立した当初に立ち返って、「それぞれの館園が充実・発展していくためには、お互いの施設を見学しあい、自らの施設の展示、運営等を研究し、そこに向上への刺激を求める」（会報創刊号「刊行に当たって」）中で個々の課題について情報を出し合うことに研修の意義を求めるべきかも知れません。

▼　最後に嬉しいニュースを1つ。全国3千の博物館が加盟している日本博物館協会の機関誌「博物館研究」において、山口県立美術館学芸員杉野愛・岩井共二両氏の論文「地元の仏像がおもしろい！－自主企画『周防国分寺展－歴史と美術－』報告」（VOl.40 No3)が、最高の栄誉である平成17年度の「棚橋賞」を受賞されました。この受賞を当協会の会員の皆様と共に喜びたいと思います。杉野さんは会報29号にも寄稿されておられますので、受賞論文とともに、今一度ご覧ください。　（芥川忠利）

編集・発行

山口県博物館協会

事務局

〒753-0073 山口市春日町8-2
山口県立博物館内
Tel 083-922-0294
Fax 083-922-0353